

報時了然尔查
錄附藝文

次世二号

大田卷



Nov. 30
de
1929

Año IV
Núm. XXXI

SUPLEMENTO LITERARIO

“El Argentin Dijo”

ある関係上、その人から彼女に紹介されたのが、そも／＼同
期以来彼女に逢った最初の事だ。
ヘレンタを知り人に持った得度で、三、四回目にその百貨店
へ二寸した買物の物に行つた私に彼女に世間話もちかぢける
と彼女はたゞ私の顔相手にふつて笑はれた。
そして四、五回目はヘレンタと彼女と私とは一編に染じ
晩餐をへ共にする程、親しさを増し、二ヶ月目には、彼
女は私の爲めに日曜の夜歩のいく時をう／＼割愛しま
くれる様になつたのです。その程度、私の食弱なホルシ
ージョが淋しくなつて行く事位は平手ヤボで、私は私のす
べを彼女に打ち出して、彼女のためならたとへ私の跡は
う／＼なまされまゝと思ふこと左程に彼女に惚れまゝつたの
です。
で、彼女はどうなのだとおつしやるのですか？勿論彼女
も私を愛してゐてくれたのです。あのハレルモのハルデイ
ン・デ・ローサの湖畔に人目をさけて二人が空つた時、いき
なり私の首を抱きしめた彼女の腕に私が、その温い香りの
よい溶けるや／＼な匂ひを嗅いだと思つた瞬間、彼女の唇が
長く／＼同私の唇にあしあつてられた一歩に、つても
確実に、彼女が私のものだといふ事を證明する事が出来
るでせう。
ほんとうに、その頃の二人は甘く／＼蜜の様な月日を送つ
たものでした。
だが、幸福は長らいつても続かません。
その頃流行したブリッペン病は、とう／＼こつ付かれてしま
ひました。そして私が病床に卧して、後日からは夢の中
に経つてしまひました。病床にある私を彼女が、二週目位
で、見舞つてくれた事は、さうだけ野暮。
私は彼女の親切に対し、友達のハルデイネロにあぢく、
頼んで持つて来てもらつてゐたハカラランダの花を、心づから彼女
に送りました。

私の好きなハカラランダだから、つと花好きが、イ、デ、
フランセーサの彼女も、ろんんで受けてくれる事だらうと
思つて……、所がハカラランダの花を三週ばかり彼女に送
つた頃から、彼女の瞳は私の眼界から消へて行き、それつき
り彼女の容は私の病床を見舞つてくれなくなつてしまひ
ました。手紙を出しても一通も返事は来ません。
然し私は彼女の愛を信じてゐました。かういふ事は最し
かつたで、決して彼女に対して恨みまじしい氣持ふんか少
しも持つて居ません。だが、彼女が来てくれなくなつ
てから三週目になると、たまたま彼女に逢つたので、今
百貨店の彼女を尋ねて見ました。
しかし……、あ、彼女の容が、見へないではありませんか。
病氣かしら？……、さう思つた私は彼女といふつと結に働い
てゐたエンフレアに、彼女の事とさういふ氣で聞いて見
ました。その女は私に唯一べつと受けたのみで、友達のエン
フレアと笑ひのこけてゐるではありませんか。
とりつても、さういふ私に泣きたい氣持を無理におさへて、
ヘレンタに面会しました。
「まあ、それじゃあ貴男は知らなかつたのか、彼女は三日前
にひまをとつてやめたのです。何でも母親の回フランスへ
ひつこしするんだと云つてね、だれも貴男が知らなかつた
変だわね……」
フランスへ行く……、さうだ、さうだ、さうだ、お馬鹿さん
たのに、さういふ、それであのエンフレアが……、お馬鹿さん
……と、嘲笑したのだ。然し……、彼女が……、
失望、落膽、加ふるに、怒恨……、けれど、病後の私が、それ等
を感ずるには、余りに力弱く、唯だ、押しつぶされた様を、疲れ
切つた感覚が、私のすべを、暗くするのみで、私はとぼ／＼と
と家へ……、おねはふりません。で、
その夜、私は天を仰いで泣けるだけ泣いて見ました。

けれどすつかり麻痺してしまつた私の神経は怒りも失望も涙もひたひたのFとして私をいつの間にか夢の中に引きこもり込んでしまつた。

一瞬間はつり解つた。忘れやうとして忘れ得ぬ彼女から突然一握の手紙がこいて、私の心臓をさくさく打つてくれました。私は恐ろしい物でもさわる様に、小刀を握つて封を切りました。中から取り出された便箋は何が書いてあつたかと思ひます。

「Audrey、さうです。たつた一言アディクスと書いてあるだけです。そしてそのペーパーの上に、美しい藍色の色彩を放つてゐるハカランダが美しく押し花されてゐました。」

ハカランダ。さうなら、

「ハカランダから彼女に送つたハカランダが絶交の表徴である事を私が知つてゐたならば……」

私は知らなかつたのです。私は少しも知らなかつたのです。そして彼女は誤解してゐるのです。

私はくしくくに丸めたペーパーを睨んだ。きつて泣きまじつた。彼女がさうして返へされたハカランダの押花が、この時「ヒラ／＼と床の上に落ちて、涙がそれをべつりと床の上にうちつけると、そのハカランダの中には、あの美しい瞳に哀愁の色をたゞよはせながら、しかも思想が潮風に吹かれてゐる彼女の幻が映じて、私を狂人の様に狂はせました。」

「あら美しい彼女。私のたつた一つの生命の花——」

たつた私は、誰をさぐる事も出来ず毎日と哭きつづけました。

「さうするに、アルゼンチンの習慣、いゝえ、態度をするには余りにホンクラであつた私。私自身を悲しい男にしてしまつたのです。」

「私も運命だ。破られた夢をぬひ合す事の出来ぬ、唯だ運命とあきらめるべく、他に仕様もありません。」

した。

誤解がせんだ悲劇——まつたく悲劇に違ひありません。誤解とは知らずに終つて信じてしまつた彼女も悲しむた事でせう。……レグシ私から去つて行つた彼女の後姿よりも彼女に去られた私のしよんほり、あとにとり残された姿を思ひ浮かべて見て下さい。

私は取り残された自分の寂しうぶ姿をその時頭に描いて見ました。それを又冷笑して見てゐる意地悪いディアップロの姿も描いて見ました。

X X X

「さうさしい香宵です。妻のトウ酔者依然としてアベニダ・デ・マヨをブランドエス・フイレしてゐます。」

会社（ハ）のヘレンテでせう。バスターンの音も響ろやかにホルターニヤの金髪に目礼すると、白髪の親父さんはトテスゴフランキエータをカフエーにつれ込みます。

そして……そして、この世にもあぐまればいモコーンはカフエーの窓際に陣取つて一杯のセルベーサに淋しい舌端をあけて満足しなげればならぬのでした。

(一九二九、十一月)

和歌 三題

あきらめし悲からちやと秋魂に
むちふりあけて、春の夜は泣く
そと寄りてわが手をにぎる比叡に
一夜ゆだねて、春の夜を行く
世の中をうらむる事はつゆあらし
頼りつべきは我が身、我が魂

世波須知庵

悪女のやつ。

市 四五生

I

蒸暑い日の冷いメロンを思はせるが様な風が重れたる
大自然の黒いカーテンの中に叫び立てる。
何処かついで所、女の笑ひが彼女の教養の程を現し
てるかの様だ。
「自身その様ふ女を惹き立てるんじやないのか」と私の理性
は冷笑する。
「實際どうなのかしら？」
「であるんだらう？」
「——かも知れない？」

「あれはこそ、私は斯ふ淋しい場所をK兄にひきず
られて、忠告されてゐるんじやないのか？」
K兄は私を聞いてゐるつもりで、時々故郷の老父母と
経済的とか云ふ語句を強く響く。
私達はとある街路に立止まつた。
K兄は私の横前に立って暫く私の顔を見つめてゐる様だ
つた。
私は今更つてゐる——彼女に会いに行きたい——事を洞察
されてゐる様で、彼の顔を見るのが耻しく、今更つた彼女
の所迄、連れてゐてくれる電車の行きを眺めつゝ、K兄と
早く別れる様に急いでゐた。
「お、何をそんなにキョトンとしてゐるんだ。インテリゲン
チマの君として、そんな事は噂のみだと思つたのは本當ふ
のか？」
實際、私は実義同様に指算して下つたK兄の期待を

うら切つてゐるのだ。
私は淋しがつた。悲しがつた。
だがどうすればいいのだ。私は黙つてた。
「黙つて居たつて解らないぢやないか。何んぞか云へ」
「K様、僕今晩約束があるのです。それで、貴男の忠告
のその事に附いては噂ばかりなので、それから安心したら
いいです。」
私は又ウソを云ふたのだ。早く脱れたい爲に。
だがK兄の進言には脱れ得ず十時10分。劇場前に会ふ
約束で別れたのだつた。
別れた私は一時程、家路をたどつて、後を振り向いた。
K兄は未だ以前の場所に立って私の方を見てゐる。
未だ解放されぬのか？
くるりと廻つた私はトボクと歩んだ。
電燈の消へた街路のイカモ、屋の店からは暖簾のは
たたく音がする。
私の淋しい心をおさげつてゐるが様に。

II

彼女に逢ひたいとする感情と逢ふまいとする理性と
の闘争は私の頭を悩まして渦巻いてゐる。
乱雑にも整理されてゐる書棚の中から年老いた父母の
何かうつつたへる様を顔が見える。
——とて、何故今晩来ぬのだらうと思つて居り、
ふ何時かの晩、彼女の身上話を聞いた時の場面が現れ
る。
頭に響いてゐる蛆虫の活動は盛んだ。
「チエツ、どうにでもなれ」と机の上にあつた時計に手がツ
かつた。
飛んだ。

詩

乾き

黒潮

世の中をたやすく見くびつた悟道者よ
猛鳥の様か
君の心はいつも乾いてゐるのだ
勝利者よ、世の資本家達よ、
君の目は黒布で蓋れてゐるのだ
うへた猛鳥の様か
君の踏みにじつた荒野に
何を求めんとしてあへいでゐるのだ

舌を焼く洋酒の味
とどすまされた君の神経
おう……恐ろしい、無理性の悟道者
御前が今踏みにじらうとしてみるも
枯れか、つたはらの
うるほひのさい女の頬に
屈逆の呪いごと、うるんだ涙が見へるまで
荒野の巷にひそむ空は得られぬ
おーあはれなる硝子玉の目をもつた
勝利者よ、世の資本家達よ
独りぼつちの御前達

静

黒潮

淋しい心め乾きと
何処でうるほすのだ
酔つた御前の幸福ふみつき物
毒杯
お、あはれなる勝利者達よ
五・十一・二九

公園の芝生に
小鳥が一羽
夕陽は赤々と燃へてゐる
青ゆりのベンチの下まで
無心な小鳥は
之をついばんで馳せる
静けさ
陰鬱な心の噂が
異国人の胸には
やるせふい僕儂にいた
懐しさが湧く
三・十一・二九
パレルモ公園の夕